

日本語コミュニケーション論Ⅱ（文章）（二〇〇九・春・金四）

土屋博映

本稿では二〇〇九年度春学期の、コミュニケーション学化学科三、四年生必修専門科目「日本語コミュニケーション論Ⅱ（文章）」をとりあげる。

一、シラバス

以下「シラバス」につき、多少手を加えて記す。

「授業題目」コミュニケーション（文章）力を身につけよう

「目的・目標」文章を正しく読む（受け取る）ことと、正しく書く（伝える）ことは、大学の講義のみならず、実社会に出てからもあらゆることにおいて、必要かつ重要な

ことである。それを知り、力をつけるために、毎回、基礎知識を学び、課題文に挑戦し、その内容を、読み取り、その過程で講義を聞き、正しい読み方を把握することを第一の目標とする。さらにその感想をレポートにまとめることによつて、記述力も身につけていくことを第二の目標とする。初歩の段階から、評論的なある程度のレベルの高い内容のままで発展させ、それに対する自分の考え、主張をまとめるという段階まで導き、読解力と記述力に自信を持たせるようにする。

「スケジュール」

第1回（4月17日）文章入門

第2回（4月24日）単語に注目

第3回（5月1日）単語に注目

第4回（5月8日）単語に注目

第5回（5月15日）文法に注目

第6回（5月22日）文法に注目

第7回（5月29日）文法に注目

第8回（6月5日）文法に注目

第9回（6月19日）心得

第10回（6月26日）心得

第11回（7月3日）心得

第12回（7月10日）心得

第13回（7月17日）心得

第14回（7月31日）文章の骨格

第15回 文章まとめ

「運営方法」毎回、テーマに基づいて、テキストをベースに、基礎を学び、実践する。各テーマのポイントを学び、基本問題を解き、わかりやすい解説を受け、さらに応用

問題にチャレンジする、という流れで授業をすすめる。授業の最初と最後に必ずレポートを提出させる。

「評価方法」出欠状況、受講態度、レポート、ノート、試験などで総合評価する。

「テキスト」「日本語練習帳」、大野晋、岩波書店

「注意事項」遅刻厳禁、私語厳禁、ノートを書きちんととり、レポートをしつかり書く（評価の対象とする）。

※日程は、実際に授業が行われた、14回にあてはめた。

二、シラバスの要点

「シラバス」の要点をあげると、次のようになる。

「題目」は、「コミュニケーション（文章）力を身につけること」とした。当然のことだが、「文章力」を身につけることが目的である。

「目的・目標」は、「課題文に挑戦」「正

しい読み方を把握する」ことを第一の目標とし、「感想をレポートにまとめる」ことにより、「記述力も身につける」ことを第二の目標とする、と明記した。これも当然のことながら、目標は、読解力と記述力ということになる。

「概要」は、上記事項の繰り返しめくが、「文章」の「基礎知識を学び、課題に挑戦し」、「正しい読み方を把握する」こととし、「授業前と後の2回、必ずレポートにまとめることによって、記述力も身につけていく」こととした。

「スケジュール」としては、毎年15回の講義で組み立てることが原則なのだが、15回が十分に与えられることが現実ではないので、あらかじめ「遊び」の時間を組み込んでいる。それが「15回」の「文章まとめ」にあたる。しかし、実際には13回の講義と1回の試験日ということで、「遊び」は2回分を想定しておかなくてはならなかった。これは反省である。

次の「運営方法」は、毎度思うのだが、

「概要」とかなり重なる部分が多い。「概要」が「理念」で「運営方法」が「実行」なのだろうが、「概要と運営」とまとめた方が書きやすいように感じている。

「評価方法」としては、「出欠状況、受講態度、レポート、ノート、試験などで総合評価とする」と記しておいた。このうち「出欠状況」をもっとも重んじておいた。これはシラバスを読んだ学生に意識させることが目的で、実際に多数の学生の「受講態度」が正確に把握できるわけではない。「レポート」は、「出欠状況」と関連する。欠席すれば「レポート」の評価がなくなるわけであるから、「レポート」は「出欠状況」と密接に関連して重要ということになる。「ノート」は、試験間近になつて全員をチェックする。詳しく見るわけではないが、一応目を通し、印鑑を押し、認定するという儀式が学生に緊張感をもたらす効果があると考えている。「試験」は「小論文」としている。定期試験一発勝負

の方式では、真面目に積み重ねた努力をしている学生に不利となる恐れがある。その点、「毎回のレポート」プラス「小論文」であれば、皆勤の学生にはかなり有利となる。

「テキスト」は、大野晋氏の『日本語練習帳』（岩波新書）である。持ち運びに手軽なことから、安価（735円）であること、著者の日本語への見識と、内容のわかりやすさ、などから選択した。

「注意事項」は、「遅刻厳禁」「私語厳禁」「ノートをきちんととり」「レポートをしっかりと書く」ということをあげた。「遅刻」は、本人の心構えとしてもよくないし、何よりもきちんと出席している真面目な学生に迷惑をかける。「私語」も同様である。調べたことはないが、「遅刻者」と「私語」をよくするものの相関関係は高いと考えている。「ノート」は前述のごとく、来るべきチェックという儀式への緊張感があることと、ノートに記すことが学習に好影響を与えると考えているからである。「レポー

ト」は、AからEまでの5段階プラス〇A（実際にはAを〇で囲む。マルエイと読む）で評価する。毎回、授業最初（用紙の表に書く）と最後（容姿の裏に書く）に2本のレポートを全員が書くのがノルマである。持ち時間は10分。字数はおよそ400字前後。評価につき、Aは上出来。授業内容を把握し、かつ自己主張が明確なもの。Bは授業内容の把握のみで自己主張がないもの。Cは授業内容の把握もおおほつがなく、もちろん自己主張のかけらもないもの。ただし、ある程度の分量がある（多少やる気がある）もの。Dは、授業内容が把握できていない、まとまりがないもの。Eはそれ以下。分量もない、やる気もない、的外れというもの。私は授業で出席も遅刻もとらない主義である。極論だが、出席などという外面的なことに時間をかけるような無駄はしたくないということ、レポートによって、欠席者は無評価となるし、遅刻者はレポートを書く時間が少なくなる（授業開始直後のレポート）し、内容が完全でなくなる（授業

最後のレポート）ので、きちんと因果応報の原理が生きていると考えるからである。

マルエイは、Aの上、つまり「上出来」をこえた、ある意味で神がかり的なレポートの評価である。これは担当講師の好みである、と明言している。基本的にはAで十分なのだが、跡見生の常識を超えたすばらしさ、それがマルエイであり、学生（かなりやる気のある学生）の多くは、マルエイを狙って授業に集中している。後に、マルエイの学生のレポートを掲げておく。

三、授業開始時の注意事項

以上のシラバスを前提として、受講学生には、初回の授業の冒頭で、さらに注意事項を与える。それは以下のようなものである。

①遅刻はしないこと。やむを得ず遅刻した場合は受講中の学生の迷惑にならないようにすること。

②私語はしないこと。私語は居眠りより罪

が重い。なぜなら自分のマイナスだけでなく、他の真面目に受講しようとしている学生も巻き込むからである。ひどい私語の場合退席させることがある。

③帽子は礼儀として授業中はかぶらないこと。ただし理由がある場合、その旨担当講師に伝え、許可をもとめること。寒いときのコート、マフラー等は認める。

④机には筆記用具以外おかないこと。かばん等、床か椅子の上におくこと。

⑤本講座の可否は、1、レポート、2、ノート、3、テキスト、それに、4、定期試験の小論文を総合評価して、決定する。テキストを持たないものには単位を出すことができないので、早めに用意しておくこと。

さらに、別枠として、レポートには、形式上の注意がある。レポート用紙の表に学籍番号等、しつかり記すこと、名前には振り仮名を記すこと、それらの枠の、上(レポート用紙最上部)には、「4月17日(金)4限 文章第1回」と記すこと。さらに表

最下部には、各自「本日の目標」を設定し、裏最下部にはその「目標の達成度」を記すことを、義務付けた。ミスした場合はそのミスの程度により減点することとした。形式を守ることが大切であることを実感させるためである。厳しいようだが、時間内に提出できなかったものは、すべてE判定とした。

四、実際の進行状況

それらを前提に、実際の授業は次のように進められた。テーマの左側が予定、右側が実際である。

第1回(4月17日) 文章入門(予定)

↓文章入門(実際)

第2回(4月24日) 単語に注目(1)

↓単語に注目(1)

第3回(5月1日) 単語に注目(2)

↓単語に注目(2)

第4回(5月8日) 単語に注目(3)

↓単語に注目(3)

第5回(5月15日) 文法に注目(1)

↓単語に注目(4)

第6回(5月22日) 文法に注目(2)

↓文法に注目(1)

第7回(5月29日) 文法に注目(3)

↓文法に注目(2)

第8回(6月5日) 文法に注目(4)

↓文法に注目(3)

第9回(6月19日) 心得(1)

↓文法に注目(4)

第10回(6月26日) 心得(2)

↓文法に注目(5)

第11回(7月3日) 心得(3) ↓心得(1)

第12回(7月10日) 心得(4) ↓心得(2)

第13回(7月17日) 心得(5) ↓心得(3)

第14回(7月31日) 文章の骨格

↓定期試験(小論文提出)

第15回 文章まとめ

学生の理解状況から始めは遅れ勝ちになつてしまうことが、反省である。結局「文章の骨格」まで進めなかった。私はパソコン画面を投影しての授業形態なのだが、プ

リント配布などもある程度加えたほうがよいかもされないとも考えている。

五、テキストの選定

周知のごとく、『日本語練習帳』は、大野晋氏の手により、岩波書店から一九九九年に刊行され、ベストセラーとなった新書である。なぜベストセラーとなったかという要因は種々あるだろうが、思いつくままにあげれば、まずは、その書名である。

『日本語練習帳』の、一つは、「日本語」。「日本語」と書名にあれば誰でも手にとつてみたくなる。現代日本人の「日本語」への興味が根底にある。その興味が穿って考えれば、「日本語」への自信のなさが一因となっているように思われる。日本では、公教育の場において、語学としての「日本語」の教育は、実はなされていない、というと言いきかもしれないが、限りなくそれに近いものがある。小学校はまだしも、中学・高校となると、「現代文」となって

しまう。そのテキストの本質は、「教養科目」である。文法は中学では「口語文法」として触れてはいるようだが、高校になると「文語文法」が主となっているようだ。では「現代語」と科目名を変えるとか、「現代文法」の授業を加えるとかしても、同じことにすぎない。何故なら「日本語」という意識にかけるからである。「国語」といって事足りる、そういうお国柄では、「日本語」に強くなりようがない。

「日本語」と明示し、自国の言語の特徴を、他国の言語との特徴と比較する姿勢を持つた上で、確実に認識するのが自国語の理解につながると言えるからである。

次のポイントは「練習帳」である。「トレーニング」と言わずに「練習帳」としたところが受けたのだろう。「練習帳」というと、小学生のような気持で気軽に読めるような雰囲気がある。さすがベストセラー作者の大野晋氏である。

次に、著者「大野晋」氏のネームバリュー。彼の本なら、買って損はない、という

イメージがある。学問書では難しいが、学術的なら、一般人でも読める。大野氏のすごいところは、難しい学問をわかりやすい学術書（一般書・教養書）として著すことが出来るというところにある。そこに加えて、ブランド「岩波書店」の「岩波新書」である。売れる要素が揃いも揃った。

私が「文章」のテキストに選んだのは、以上を踏まえ、安価であること、重くないこと、「読みきれぬかも」という印象を生に与えられると考えたことなどからである。

六、テキストの内容

本書の目次は次の通りである。

- I 単語に敏感になろう
- II 文法なんか嫌い——役に立つか
- III 二つの心得
- IV 文章の骨格
- V 敬語の基本

配点表

あとがき

シラバスでは、Ⅰ〜Ⅳをとりあげた。しかし、実際の授業では、Ⅳには入れなかつたわけだが、結果としてそれでよかつたのか、と今は考えもしている。

本書は「練習帳」と銘打っているが、誰もが考えるドリルのような練習帳ではない。確かに問題は与えられているのだが、解答はほどほどにして、著者の解説を読むほうが面白いし、本書の役割としては、むしろそうするのが正しいだろうと言える。問題の反復に重きがあるのが「練習帳」だとすれば、本書は「(日本語の)啓蒙書」と位置づけるものだろう。

「配点表」は余分である。というより「練習帳」の対面を保つために付随させたような感じがしないでもない。Ⅳ「文章の骨格」は、Ⅰ〜Ⅲよりもさらに「練習帳」にはならない、意地悪な見方をすれば、練習帳でも啓蒙書でもない、中途半端な存在である。

V「敬語の基本」は、改めて、別冊として刊行してほしかった。日本語にとつて「敬語」が重要なことはわかるが、「日本語練習帳」としてはⅣよりもさらに浮いた存在となっている。

また、各章のネーミングだが、ⅠとⅡ、とくにⅡは、Ⅲ〜Ⅴの名称と異なっていてバランスが悪いと思う。Ⅱの副題に存在価値があるのか、表現を含めて大いに疑問を抱いている。バランスをくずすのなら、Ⅲ〜Ⅴまですべて統一をとらない名称にすべきだったというのが私の美的感覚であるが、どうであろうか。

ともあれ、Ⅰ〜Ⅲまでの大野氏の「日本語論」は大いに若い学生に役立つと思う。実践するというよりは「日本語」の特徴を理解するのに役立つと思うのである。もちろん実際の授業では、問題を解くという実践はしているのだが、単なる答え合わせでないところが、ためになるということなのだ。

七、授業の進行

授業の流れは、テキストの問題(練習)に沿って進行させた。大体についてはすでに「四」章で述べた。

本書で大野氏は、各問を、「練習①」という呼び方で著している。「練習帳」だからそう呼んでいるのだろう。実際に授業をしたⅠ〜Ⅲの合計で、練習が25問ある。が、実はⅢ「二つの心得」には練習が一間もない。「心得」だからなくてもよいのかもしれないが、そういう章を設けること自体「練習帳」ではありえない。この点も私が「啓蒙書」と位置づける理由の一つである。

ただし、以上の理由が学生の「文章」の実践に役立たないというわけではない。大野氏の卓越した見識が随所に顔を出し、大いに学生の「啓蒙」と実践に役立ったと考えている。

次に、25問の「練習」すべてを掲げておく。

I 単語に敏感になろう

- 1、「思う」と「考える」
- 2、「思いこむ」と「考えこむ」「思い出す」と「考え出す」
- 3、「うれしい」と「よろこばしい」
- 4、「大丈夫」と「しっかり」
- 5、「通る」と「通じる」
- 6、「最良」と「最善」
- 7、「意味」と「意義」
- 8、「自立」と「独立」と「孤立」
- 9、「明白」と「明確」と「鮮明」と「明晰」

II 文法なんか嫌い

- 10、「は」の働き
- 11、「は」の働き
- 12、「は」の働き
- 13、「は」の働き
- 14、「は」の働き
- 15、「は」の働き
- 16、「は」の働き
- 17、「は」の働き
- 18、「は」の働き

19、「は」の働き

- 20、「は」の働き
- 21、「が」の働き
- 22、「が」の働き
- 23、「が」の働き
- 24、「は」と「が」の働き
- 25、「は」と「が」の働き

「I 単語に敏感になろう」は、確かに学生に単語への敏感さを与えたかと思う。類義語はあくまでも類義語であり、本質は異なっている、だから「推敲」の必要性、わかりやすく言えば「言葉を選ぶ」必要性は、十分に学生に伝わったと思う。言葉への敏感さ、好奇心を養えたことはよかったと思う。

「II 文法なんか嫌い」は、「練習」を見ればわかるとおり、「は」と「が」の働き、なかんずく「は」の働きに焦点がしぼられている。結論から言えば、「は」は係助詞で、「が」は格助詞、その違いを知っておこうというものであるが、単純にそう記し

ただけでは学生に実感がわかない。何度も

何度も練習し、結果「私は土屋です。」と「私が土屋です。」の相違ができたようだ。「は」と「が」の本質を誤らなければ相当な文章が書けるといえるのは、卓見である。この点も「文章」の授業として大いに効果があったと思う。

なお、IIIで言う「二つの心得」は次の二つである。

III 二つの心得

- 「のである」「のだ」を消せ
- 「が」を使うな

「のである」「のだ」は不用意に使うな、押し付けになるということである。「が」は接続が曖昧になるから、不用意に使うなということである。この章は「練習」もなし、授業で解説に終わっただけである。解説にもそれなりの意義はあったが、前者を取り立てて本書で取り上げる意味はない

と思う——その重要度において——し、後者は「Ⅱ」の「が」のところで取り上げるべきだと考える。

八、学生のレポート

最後にマルエイを取った学生のレポートを掲げて本稿のまとめとする。コミュ文3年、同一人物の同一時間のレポートである。持ち時間各10分。「意味」と「意義」がテキストのテーマ、「愛する」と「恋する」を、応用問題として課した。

1、「意味」と「意義」

コミュ文3年 YIさん

「意味」には比喩的な使い方が出来ると思います。微かであいまいな分、一つの「言葉」や「物」に対していくつかの意味を与えることが出来るのではないのでしょうか。

例えば「花束」

○感謝 ○愛情 ○友情

○時には嫌味

このように一つの物に対して色々な「意味」を持たせて動かす事が出来るのです。

短歌などでもこういったことをしています。ただ、あいまいな分、悩む原因になることも多々あります。

○「愛する意味」 ○「生きる意味」

これらはすべて、「答えのない問い」である。すべてに「自分で！」答えを見出しつつつけ加えてゆくことができるのです。

それは「意義」もそうです。「正義とは？」と問われてもすぐには答えられないし、正解なんてものは無いですよ。なぜなら「意義」は一本筋を通さなくてはならないからです。絶対に自分の中でブレてもゆれてもいけないものなのです。

生きていく上で必要な「義理人情」は頭のとっぺんから体の中までちゃんと通して真直ぐしている人が行える一つの「正義」だと思っんです。

あいまい「意味」の美学とまっすぐ「筋な「意義」の正義を考えます。

2 (裏)「愛する」と「恋する」

コミュ文3年 YIさん

「愛」は動詞で「恋」は名詞というのを良きききます。そして「片思い」は恋だけ、思い合えるのは愛、つまり「愛し合う」。これらをふまえて考えると「愛」は無償、「恋」は有償である。

誰かを思い火のように燃え自分までやけどを負いながらも夢を見るのが恋。相手の心も手に入れたいと望む故の感情。相手と思う自分を愛しているだけ。

しかし愛は違います。澄みきった空のように相手を思い、その相手から愛されなくても思い続け照らしてあげたいと願う。相手が幸せであれば、この世界のどんな苦しいことからも守ってあげたい。

愛しい人が生きていればこの世界のすべてが優しく見える。

「愛する」とは愛しいものと愛しいものがある世界の現実を想うこと。「恋する」は想っている相手との間にある二人の世界を夢見ること。

「恋」していることを「愛」しているとか
んちがいすることが一番悲しいです。真剣
に相手を想い愛することが出来ればストー
カー殺人なんかおきません。